

中原中也 「うた」の発見と沈黙の音楽

(220326 ©佐々木幹郎)

中原中也(明治四〇年＝1907～昭和一二年＝1937)

①「悲しみ」の原形

曇天

ある朝 僕は 空の 中に、
黒い 旗が はためくを 見た。
はたはた それは はためいて ゐたが、
音は きこえぬ 高きが ゆゑに。

手繰り 下ろさうと 僕は したが、
綱も なければ それも 叶(かな)はず、
旗は はたはた はためく ばかり、
空の 奥(おく) 処(が)に 舞ひ入る 如く。

かゝる 朝(あした)を 少年の 日も、
屢(しばしば)々 見たりと 僕は 憶ふ。
かの時は そを 野原の 上に、
今はた 都会の 薨(いらか)の 上に。

かの時 この時 時は 隔つれ、
此処(こゝ)と 彼(あそこ) 処(こゝ)と 所は 異れ、
はたはた はたはた み空に ひとり、
いまも 渝(かわ)らぬ かの 黒旗よ。

(初出「改造」昭一一年七月。『在りし日の歌』所収。昭一三年＝1938)

(参考) 生前発表詩篇

子守唄よ

母親はひと晩ちう、子守唄をうたふ
母親はひと晩ちう、子守唄をうたふ
然しその声は、どうなるのだらう？
たしかにその声は、海越えてゆくだらう？
暗い海を、船もゐる夜の海を
そして、その声を聴届けるのは誰だらう？
それは誰か、ゐるにはゐると思ふけれど

しかしその声は、途中で消えはしないだらうか？
たとへ浪は荒くはなくなるともとたとへ風はひどくはなくなるとも
その声は、途中で消えはしないだらうか？

母親はひと晩ちう、子守唄をうたふ
母親はひと晩ちう、子守唄をうたふ

淋しい人の世の中に、それを聴くのは誰だらう？
淋しい人の世の中に、それを聴くのは誰だらう？

(初出「新女苑」昭一二年七月増大号)

(参考) 若山牧水(1885||明一八年~1928||昭三年)の歌から

白鳥(しらとり)は哀しからずや空の青海の青にも染まずただよふ

(『別離』上巻、明治四三年||一九一〇)

白鳥が哀しいのか？

それを見ている人間が哀しいと思っっているのか？

実は、相手は誰でもよく、哀しみに満ちた男の独り言であり、白鳥に語りかけたつづやきにすぎない。

(注) 歌語としての「かなし」には、かなしい他に、うれしい、いとおいしい、かわいいの意がある。

「喜びもかぎりなきはかなし、悲しきもかぎりなきはかなしなり」

香川景樹(江戸後期の歌人)

詩と散文との関係を考える

骨

ホラホラ、これが僕の骨だ、
生きてゐた時の苦勞にみちた
あのけがららしい肉を破つて、
しらじらと雨に洗はれ、

又ツクと出た、骨の尖さき。

それは光沢もない、
ただいたづらにしらじらと、

雨を吸収する、
風に吹かれる、
幾分空を反映する。

生きてゐた時に、
これが食堂の雑踏の中に、
坐つてゐたこともある、
みつばのおしたしを食つたこともある、
と思へばなんとも可笑おかしい。

ホラホラ、これが僕の骨――

見てゐるのは僕？ 可笑しなことだ。
靈魂はあとに残つて、
また骨の処にやつて来て、
見てゐるのかしら？

故郷ふるさとの小川のへりに、
半ばは枯れた草に立つて、
見てゐるのは、――僕？
恰へちやうど度立札ほどの高さに、
骨はしらじらととんがつてゐる。

（初出「紀元」昭9・6、初出時の詩篇末尾に「一九三四・四・二八」の日付。『在りし日の歌』収録時に日付は削除。）

（参考）同時期の書簡から

140 昭和九年四月二六日 吉田進宛 封書

表 山口市吉敷 吉田進様 弔辞
裏 東京四谷花園町九五 花園アパート 中原中也 四月二十六日

【消印】四谷 9・4・8 前8―12

【用紙分類】巻紙―イ

【筆記具】毛筆

拝啓

承はり候へば伯母上様には御急病にて突然お逝なくなり遊ばされ候由一同驚入申候

皆々様さだめしお力落しの御事と御察申上候 日頃御元氣な伯母様のこと故いまだにたゞ夢のやうに存ぜられ候

思へば昨年こぞの暮には私共上京の節わざわざ御いで被下難ありがた有き御言葉など賜り候がお別れとは相成申候 誠に人命のはかなさ感じ入申候

先は右とりあへず御悔みまで如かくのことごとく斯に御座候 頓首

四月二十六日

中原中也
孝子

吉田進様
伯母上様

汚れつちまつた悲しみに……（『山羊の歌』昭九年＝1934）

汚れつちまつた悲しみに
今日も小雪の降りかかる
汚れつちまつた悲しみに
今日も風さへ吹きすぎる

汚れつちまつた悲しみは

たとへば狐の革かはごろも 裘

汚れつちまつた悲しみは
小雪のかかつてちぢこまる

汚れつちまつた悲しみは

なにごむなくねがふなく
汚れつちまつた悲しみは

倦怠けんたいのうちに死を夢む

汚れつちまつた悲しみに

いたいたしくも怖おそい 気づき

汚れつちまつた悲しみに

なすところもなく日は暮れる……

（参考）『山羊の歌』校正刷本初校（昭七年＝1932）

汚れつちまつた悲しみに

今日も小雪の降りかかる

汚れつちまつた悲しみに

今日も風さへ吹きすぎる

汚れつちまつた悲しみは

なにごむなくねがふなく

汚れつちまつた悲しみは

倦怠けんたいのうちに死を夢む

汚れつちまつた悲しみは

たとへば狐の革かはごろも 裘

汚れつちまつた悲しみは

小雪のかかつてちぢこまる

汚れつちまつた悲しみに

いたいたしくも怖おそい 気づき

汚れつちまつた悲しみに

なすところもなく日は暮れる……

(参考) 未発表詩篇

雪が降つてゐる…… (最終稿・第二次形態。昭一二年＝1937春「ノート小年時」)

雪が降つてゐる、

とほくを。

雪が降つてゐる、

とほくを。

捨てられた羊かなんぞのやうに

とほくを、

雪が降つてゐる、

とほくを。

たかい空から、

とほくを、

とほくを

とほくを、

お寺の屋根にも、

それから、

お寺の森にも、

それから、

たえまもなしに。

空から、

雪が降つてゐる

それから、

兵営にゆく道にも、

それから、

日が暮れかゝる、

それから、

喇叭ふらつぱがきこえる。

それから、

雪が降つてゐる、

なほも。

(一九二九・二・一八)

(参考) 「雪が降つてゐる……」(初稿・第一次形態。昭四年＝1929「ノート小年時」)

雪が降つてゐる……

雪が降つてゐる、

とほくを

捨てられた羊かなんぞのやうに

地平線に、

雪が降つてゐる、

畑の上に。

たかい空から、

雪が降つてゐる

お寺の庭にも、

お寺の屋根にも、

たかい空から、
たえまもなしに。

雪が降つてゐる
兵營にゆく道にも、
日が暮れかゝる、

——喇叭がきこゑる。

(一九二九・二・一八)

「雪が降つてゐる……」第一次形態

「雪が降つてゐる……」第二次形態

雪が降つてゐる、

とほくを

捨てられた羊かなんぞのやうに

地平線に、

雪が降つてゐる、

畑の上に。

高い空から、

雪が降つてゐる

お寺の庭にも、

お寺の屋根にも、

たかい空から、

たえまもなしに。

雪が降つてゐる

兵營にゆく道にも、

日が暮れかゝる、

——喇叭がきこゑる。

(一九二九・二・一八)

雪が降つてゐる、

とほくを。

雪が降つてゐる、

とほくを。

捨てられた羊かなんぞのやうに

とほくを、

雪が降つてゐる、

とほくを。

たかい空から、

とほくを、

とほくを、

お寺の屋根にも、

それから、

お寺の森にも、

それから、

たえまもなしに。

空から、

雪が降つてゐる

それから、

兵營にゆく道にも、

それから、

日が暮れかゝる、

それから、

喇叭がきこゑる。

それから、

雪が降つてゐる、

なほも。

(一九二九・二・一八)

③ 歌とは何か

言葉なき歌

あれはとほいい処にあるのだけれど
おれは此処で待つてゐなくてはならない
此処は空気もかすかで蒼く

葱の根のやうに仄かに淡い

決して急いではならない
此処で十分待つてゐなければならぬ

処女の眼のやうに遙かを見遣つてはならない

たしかに此処で待つてゐればよい

それにしてもあれはとほいい彼方で夕陽にけぶつてゐた

号笛の音のやうに太くて繊弱だった

けれどもその方へ駆け出してはならない

たしかに此処で待つてゐなければならぬ

さうすればそのうち喘ぎも平静に復し

たしかにあすこまでゆけるに違ひない

しかしあれは煙突の煙のやうに

とほくとほく　いつまでも茜の空にたなびいてゐた

（「言葉なき歌」第二次形態、『在りし日の歌』昭一三年所収。
初出「文学界」昭一一年一二月号、同年一〇月制作推定）

【註】

「とほいい」は「とほい」の山口方言。本篇が「文学界」に寄稿された時期に、長男文也が満二歳の誕生日（昭一・10・18）を迎えている。文也が急逝するのは、それから約一カ月ほど後の一月一〇日であった。本篇は文也に病気の徴候が少しも見えない時期に書かれている。昭和一一年一〇月三〇日の日記に、中原は次のように記している。

「もうもう誰が何と云つても振向かぬこと。詩だけでもすることは多過ぎるのだ。／二十二日以来外出せず。今月は外出せしこと四五回。月に五回も外出すれば沢山なり。プロザイックな連中を相手にするに及ばず。坊やでも大きくなつたら、もつと映画でも見るべし。／詩に全身挙げて精進するものなきは寧ろ妙なことなり。斯くも二律背反的なものを容易に扱へると思へるは、愚鈍の極みといふべきだ。／語学をやらねばならぬ。このことだけが大切なり」。

昭和一二年九月に刊行された『ランボオ詩集』の「後記」（昭一二年八月二一日制作）に、中原は次のように記している。

云換れば、ランボオの洞見したものは、結局「生の原型」といふべきもので、謂はば凡ゆる風俗凡ゆる習慣以前の生の原理であり、それを一度洞見した以上、忘れられもしないが又表現することも出来ない、恰も在るに在るが行き道の分らなくなつた宝島の如きものである。

④ 中原中也の思考

「無限」について

* 日記から

昭和二年四月二十四日（日曜）

私は私の身の周囲まはりの材料だけで私の無限をみた。

【参考】「盲目の秋」（全4節のうち第1節冒頭）

風が立ち、浪が騒ぎ、
無限の前に腕を振る。

その間（かん）、小さな紅（くれなる）の花が見えはするが、
それもやがては潰れてしまふ。

風が立ち、浪が騒ぎ、
無限のまへに腕を振る。

もう永遠に帰らないことを思つて
酷薄な嘆息するのも幾たびであらう……

私の青春はもはや堅い血管となり、
その中を曼珠沙華（ひがんばな）と夕陽とがゆきすぎる。

（『山羊の歌』所収、初出「白痴群」第6号、昭5）

* 発言から

が、自分といふものは目がさめたらぬたんですからね。

（「詩人座談会」、「詩精神」昭10・1）

【参考】アルチュール・ランボー
銅が眼を覚ましてラッパになつてゐるのに気がついたとしても、それは少しも銅
の落ち度なんかではありません。

（『イリュミナション』宇佐美斉訳）

* 評論から

「これが手だ」と、「手」といふ名辞を口にする前に感じてゐる手、その手が深く
感じられてゐればよい。

（「芸術論覚え書」昭10・2・8）

* 散文から

人の心の奥底を動かすものは、却て人が毎日いやといふ程見てゐるもの、恐らく
は人々称よんで退屈となす所のものの中にあるのだ。

（筆者不詳、「一つの境涯」、昭10後半推定）